

3. 開放座談会

開催地の皆さんを交えて、参加者全員で『防災教育と地域防災の相乗効果』をテーマに議論した。

黒潮町から参加された方々

大西 勝也さん（黒潮町長）

畦地 和也さん（黒潮町教育委員会教育次長）

松本 敏郎さん（黒潮町情報防災課長）

友永 公生さん（黒潮町産業推進室産業推進係長）

以下略



片田 多くのパネルディスカッションは、前に登壇者が並ぶんですけど、ちょっと異様な雰囲気ですよ。形式的にパネリストの発言が二巡して、はいおしまいみたいな形になっちゃうのは、つまらないと思い、このようなかたちにしてみました。黒潮町にくと、このメンバーで議論することが多いのですが、今日はその議論をそのままここに開放したと思います。それから、真ん中の 5 人だけで話し続けるつもりはありませんので、「ちょっと一言」とか「それは聞捨てならん」というのがありましたら、手を挙げてください。何本かマイクを用意して、その辺で待機しているので、大いに口を挟んでください。

それでは、始めていきますが、テーマをある程度絞んなきゃいけないと思います。ここにお集まりいただいているのは、皆さん学校の先生です。やはり防災教育として、「子ども達とどう向かい合い、何を目指すべきなのか」ということに関心をお持ちになって集まっておられると思います。ところが、真ん中にいるのは、町長をはじめ、教育次長であり、役場の防災課長であり、また産業振興の係長さんであったりして、どちらかというと教育のメンバーではございません。敢えてこのような人員配置にしました。それは、地域で考えている防災と防災教育の関係がどうあるべきなのかを議論したいと思ったからです。もちろん先生方の関心事であるところの「教室で子ども達にどう向かい合うのか」ということも重要です。だけど、地域あつての学校であり、全体の雰囲気の中で学校教育も推進される。また、学校で教えたことだけが

子ども達が身に付けることではなく、この黒潮町という環境の中で子ども達が育まれる。そのある一部分を学校が担っている、という位置付けの中で考えているんですね。そういった意図で、敢えて真ん中には学校の先生を一人も置いてないという状況になっています。従って、先生方からすると、「現場を知らない奴らの議論だ」という話になるかもしれない。そのときは、手を挙げて「ちょっと聞捨てません」と口を挟んで頂きたいと思います。まずは自己紹介から始めましょうか。



片田 敏孝 教授

大西 黒潮町長の大西です。先生からもありましたように、決して防災のプロであったりするわけではないので、話の途中で色々突っ込みを入れて頂ければと思います。よろしくお願い致します。

松本 黒潮町役場の情報防災課の課長をしております松本と申します。昭和31年生まれで59歳です。私が防災課長になったのは、新想定が公表された次の日です。それまでは、総合振興計画などいろんなところで40年も役場におります決して防災の専門家ではないですけど、一生懸命今日は話し合いに入っていこうと思います。よろしくお願いします。

畦地 教育委員会の畦地と申します。この連絡協議会は1回目からずっと参加をさせて頂いております。1回目2回目に一緒に会議に参加していた他地域の先生方から、今日ここにお出で頂いて、「畦地さんが如何に遠い所から来ていたのかよくわかりました」と言われました。ようこそ、黒潮へおいでいただきました。僕は、防災教育は教育の本質に迫ることができる一つ的手段だと思っています。そこらへんを皆さんとともに二日間で議論させて頂きたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

友永 黒潮町役場の産業推進係の友永と申します。缶詰を担当しております。試食販売コーナーを設置しますので、是非あとでお願いします。僕は以前防災担当しておまして、東日本大震災発生とともに異動した、というちょっと変な立場があります。防災教育はかかわりたいと思いつつ、かかわりきれずに担当を外れたということがありましたので、今日はとてもいい機会になったと思っています。よろしくお願い致します。

片田 友永さんのお子さんは今何年生でしたっけ。

友永 高校1年と中学2年です。

片田 ちょうど震災後の防災教育を受けてこられたお子さんをお持ちなので、“家庭の親御さん”という立場からも発言を頂きたいなと思います。

さて、誰かしやべらなきや始まらないので、僕がとりあえずの仕切りをします。4年前になりますが、黒潮町は、「全国一の34.4mの高さの津波が数分で来ます」という新想定を突き付けられました。もうめちゃくちゃショッキングな状況に陥ったと思います。そこから今日に至るまでの4年間があるわけです。まず、町長さんから今黒潮町のおかれている状態についてご紹介を頂けないでしょうか。

大西 最初に言っておかなければならないのは、黒潮町の防災は、新想定が出てから本格的にスタートしたと思っています。当時のことを正確に振り返ることは、無理なんじゃないかなと思います。よく「当時どうでしたか」と質問を頂くのですが、そのときは「当時どういう発言をし

ていたか」を自分で振り返って、そのときってこう
いう思いだったんだろうなということで、構成しな
がらお話させて頂くことがあります。今日もそうい
う構成でお話させていただきます。

公式発表されたのは3月31日でした。4月2日
が月曜日で新年度の初登庁日。とにかくメディアと
いうメディアが殺到しまして、空を見ればヘリコプ
ターという状況でした。想定公表当初は、ほぼメデ



大西 勝也 町長

ィア対応で追われました。ただし、メディア対応も適切にできるわけではないんですね。自分達
が頂いた数字は、津波高さ 34.4m、最大震度 7、それから黒潮町とは限らないけれど、高知県
の沿岸に 1m津波が到達するまで最短 2分ということでした。この3つの数字を聞いたら、住
民の方はどう思われるか。自分なりに想像してみますと、「最大震度 7、びっくりするような揺
れがあって、2分で 34.4m の津波が来る」と。「そりゃ諦めないほうがいいよね」と今に
なるとやっとそういうふうに見えるようになりました。当時は、少なくとも「逃げない」とい
う意思表示をされた住民が多数おられたのは厳然たる事実でございます。本当に「逃げない」
と思っていたのかどうかは別にして、そういう発言をされる住民の皆さんが続出したというの
は事実でございます。従いまして、当時、防災課長たちと、「自分たちはどこからスタートし
なければならないのか」を相談したんですけども、“避難を諦められる方”がたくさん出てく
ると、防災のスタートラインにすら立てないということで、とにかく「諦めない」、「避難放棄
者を絶対出さない」ことから始めました。これが、自分達が本格的に防災を始めたときの第一
フェーズの最大の命題でした。これはずっと続いております。

もう一つは、直感的なことだと思うんですけども、「行政だけでできない」というのはま
ず誰でもわかる話です。それから、この行政も色々な階層区分がありまして、国があって県が
あって市町村があります。「そのどこか一つだけでも無理だろうな」と、これも直感的に誰も
がわかることでございます。その中で自分たちが何をしなければならないのか。今振り返ると、
やりながら整理をしていった、というのが本当のところではないかなと思います。まずは、「混
乱を収めなければならない」ということと、「過度の不安をお持ちの住民の方へのケアはどう
あるべきか」ということが、自分たちに最初に課せられたことだったと思います。

あれ以来、相当の回数、地域に入らせて頂きました。今年 10 月で新想定公表から 3 年半が
経ちましたが、この間に行政が主導して実施した防災関連イベント、ワークショップであつた
りとか避難訓練であつたりとか、こういったものの実施回数は 900 回を超えました。ご参加頂
きました住民の方の延べ人数は 45,000~46,000 人で、当町の人口の約 4 倍になります。ただし、
これが本当にベストの手段だったのかどうかは、検証しなければならないと思っています。

課長にもよく言うんですけど、「助かった命をどう繋ぐのか」とか「町の復旧復興をどうや
っていくのか」とか「産業復興をどうやって町を繋いでいくのか」ということは、これから本
格的に計画を立てて進めていかなければなりません。何よりもこの防災の至上命題は、「そ
のときに、如何にいかにか人命が確保されるか」ということだと思っています。津波防災につ
いては、この命題に対して自分は二つの課題を捉えています。第一は「本当に逃げるのか」とい
うことで、もう一つは「本当に逃げられるのか」ということです。この二つの課題の解決の道

筋をつけない限り、当町が掲げている犠牲者ゼロは達成できないなと思っています。この二つを解決するためには、やはり防災あるいは避難行動は、自主的であったり内発的な思いによって、住民自分でやるしかない。とにかく、そのご本人にお任せする以外ないと自分たちは思っています。行政の情報伝達で、住民の皆さんお一人一人に、すんと落とし込めるかという、非常に限界があるのかなと思っています。

一つ明るい兆しが見えてきていますが、先般の地区防災計画シンポジウムの田ノ口小学校の児童の発表です。あれを聞いて伝わらない大人は多分いないなと思いました。これまで、「地域が子どもを守る」という感覚を自分たちはどこかで持っていたんですけど、もしかすると「子どもたちが地域を守っていく」ことになるのかなと思っています。もちろん、最終的には「子どもも地域も」ということですが。そういったことを通じて、本格的に防災教育を始めていただいて、まだ2年ほどですが、短期間でこんなに成果が出るんだなと、すごく勇気付けられてきました。

新想定が出てから今日に至るまでの、自分の感想みないなものになりましたけれども、詳しくはですね、このあと、防災課長が補足します。

松本 町長が話せなかった黒潮町の当初の状況をお話しさせて頂きたいと思います。

新想定が公表されたとき、町長には、おそらく30日の13時前には情報が入ったんじゃないなと思います。私は30日の金曜日は年休を取っていました。その前に厳しい仕事が続いて、「やっとこれで楽になるな」と言って、女房と一緒に映画を見ていたところに携帯電話が鳴って、「土曜日に急遽会議をするので来てくれ」という話から始まっております。



松本 敏郎さん

それで31日の会議に行くと、幹部が全員集まって、庁舎の3階で南海地震対策推進会議をやっているわけです。この会場のように、皆さんがマスコミで、自分たちが職員という状況で会議をしていました。非常に緊迫した雰囲気があったわけですが、誰もしゃべらない会議でした。町長が一人「平静を装え」というような話をしていました。後でマスコミの方に聞いてみると、「葬式のような会でしたね」と言っていました。私自身、40年も役場にいるんですけど、あれぐらい悲壮感に満ちた会は初めてでした。まずは自分が「どういう状況なのか」を頭に入れること自体が、相当困難であったような状況でした。

翌日には、多くの住民の方がマスコミを通じて情報を知ることになるので、おそらく沢山の方が電話をかけてくるだろうということで、日曜日は朝から役場の防災対策室の職員が待機しました。担当数の職員が収集された。しかし、電話ほとんど鳴らなかったんですね。住民からの問い合わせはほとんどなく、静かな日曜日のまま終わりました。これを見たときに、何も言っていないということは、諦めてしまったのではないかと感じたわけです。それを感じたときに、背筋が凍るように恐ろしくなりました。これから自分たちが防災に担当するのに、住民から全く当てにされてない無念さと、諦めることの危なさにですね。34mの津波は来なくても、この町は歴史的に何回も津波にやられています。7mの津波でも逃げなければ死んでしまう可能性が出てきますので。そこが恐ろしかったというのが正直な気持ちでした。

公表時の国からの情報は、「黒潮町 34.4mの津波、最大震度は 7、高知県には 2 分で津波が到達」という 3つの情報だけでしたので、1 週間くらいして、私は情報防災課長として町長室に行って、町長に「何からしましょうか」と聞きました。町長からは「防災思想を作って欲しい」と言われました。「おそらく国や県は、細切れに次から次へと色んな情報を出してくるでしょう。そのときにぶれない、住民が不安にならないような“考え方”から作って欲しい」と言われたんですね。この回答には、私も意表を突かれた感じで驚きました。しかし、冒頭にも言いましたように、私はもともと総合振興計画の仕事が長かったので、そこでは思想から入って町作りをするという仕事でした。例えば、この長さ 4km の入野の砂浜を、「私たちの町は美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」という言葉で 30 年前のバブルの時に作ったのがうちの町役場ですね。だから、「思想を作れ」という指示は私には凄く腹に入りました。

そして、付け加えて言ったのは、「東日本の被災地をしっかりと見てきて欲しい」と。「まだ松本は一回も行ったことないでしょう」と。ちょうど国交省から南海トラフ地震対策係長が出向に來たばかりだったので、「被災地に二人で行ってきて欲しい」ということで、一週間行ってきました。そして、気仙沼を拠点にして、仙台から田老まで見てきたんですけど、現地で衝撃を感じたのは、東松島市の野蒜の駅、そこに行ったときです。野蒜の駅破壊されていたんですけど、野蒜小学校の奥の北側にあります。そこから南側に向けて、海見て歩いて行くと、ふるさとの景色とその東松島市の野蒜の景色が頭の中でだぶってしまいまして、呆然とした経験をしました。これ現地行ってみないとわからないです。それで、これは防災課長として、これから心してかからなければならぬと決心をしたような状況がありました。

そういうことがあって、冒頭、國友係長が少し説明してくれましたが、町民が共有する言葉を作って、「諦めない」というのが基本理念です。そこから新たな具体的な政策を 17 個作って、そのトップに教育・啓発を入れました。そして、それをどういう政策に落とし込むか、これを順次考えていくような流れを作りました。

片田 ここまでで、34.4m の衝撃として、当時のことを振り返って頂きました。騒ぐのはマスコミだけで、町民は騒がない。何となく諦めがまん延しているような雰囲気からスタートした。そういう地域社会、そういう大人たちの状況の中で、子どもたちはこれをどう受け止めていたのが大変気になります。間違いなく大人は尋常じゃないですよ。尋常な精神状態じゃない。おそらく子どもたちも、あの 3.11 を見た残像が頭に残っている。そして、大きな津波想定が出たということも知っているであろう。その中で、子どもたちはどうであったのか。そして、それに対して、あの頃、教育委員会もしくは学校は、どういうふうに子どもたちに向かい合っていたのか。畦地さん、どうですかね。

畦地 実は、そのとき僕は教育委員会ではなく、別の部署にいました。なので、そのときに子どもたちがどういうふうに捉えたのか、あるいは先生方がどういうふうに捉えたのかは、私が言っても不確かなことになってしまうので、この後、会場の皆さんからお話しして頂いたほうがいいのかなと思います。

何かとってつけたような話になりますけども、この間ずっと自分が思っていたのは、「これで何かできそうだな」と思いました。「新たなことにチャレンジできるのではないかな」と思ったのは事実です。僕は、出たり入ったりですけど、三分の一くらいの年数は教育委員会で働いているんです。その中でずっと僕は、「教育って結局、郷土の人を作ることが究極の目的

だ」と思っているんですね。ちょっと言葉は簡易かもしれませんが、要は「黒潮に生まれた人は、黒潮のために人生を捧げて頂きたい」と。「この町に住む、住まないにかかわらず、故郷に命を捧げて貰いたいな」と。

「故郷、郷土のために人を作る」というのは、江戸時代までは普通だったんですよ。藩は藩で人材を作りますし、町や村々の寺子屋で人を作る。地域の者が地域の人材を教育をしていく、人を作ってい

くというのは、これは当たり前だったんです。けれど、明治5年に太政官布告が出て、教育令が出るわけです。それによって、殖産政策のために、オールジャパンで国家のために働く人間を作ることになった。これが今の教育までずっと150年続いてくるのではないかなと思うんです。唱歌で「ふるさと」という歌ありますよね。ふるさとの二番はどういう内容の歌かというと、志を果たして故郷に帰るんです。志を果たしてから帰るんですね、故郷に。明治以降の教育では、確かに新しい国家を作るために求められる教育観だったと思うんですけども、現在、このように至るところで人口がどんどん減ってきて、地域の産業も衰退していく。これを何とかしようと思ったときに、「志を果たしてから帰ってくる人材」ではなくて、「志を果たすために帰ってくる人材」を作っていかなくちやいけないのではないかなと、最近思っています。

防災教育は地域によって全然置かれた状況が違うので、“究極の地域教育”、“地元教育”なのではないかなと思うんです。そういうふうに考えると、防災教育から「故郷に志をはたすために帰ってくる人材」の育成というのが、何かできそうだなと。厳しい想定を突き付けられたから漠然と何かできるんじゃないかと思ったことが、段々片田先生等とお付き合いさせて頂く中で、防災教育を通じて、本当の地域人材、故郷のために命を捧げる、志をはたすために帰ってきてくれる、あるいは帰らなくても常に故郷のために何か送り続けてくれるような人材、そういう人材を育てていけるのではないかなと思うようになりました。

片田 友永さんは、震災以前に防災におられた。ここまでの防災を全部見てきた中で、今の状況等も踏まえて、まだできれば家庭のお父さんという立場も含めて、少しお話を頂ければと思います。

友永 私は、8年間防災担当をしていました。最後の年に東日本大震災が起きまして、3月17日に気仙沼に入りました。3月19日には町長も現地に入りました。この被災訪問が、町長がトップとして今の防災を引っ張っている、大きな出来事の本当のきっかけになっていると思っています。それから1年後に新想定が出るまで、私たち役場全体で見直しをし、一生懸命対策を練り直していたのですが、34mと想定によって、私達のやってきたこと、やり直そうとしてきたことを全部否定されたような思いがありまして、そういったショックも行政内部にはありました。

ただ、そうは言っても、先ほど防災課長も言われたように、今後の町作りというところで、いろいろな対策をとってきました。今になれば、34mを逆手に取ったような対策も進めていますが、それは1年、2年と、いろいろなことを積み重ねてきた結果、やっとこういう意識になってきた。この流れを知らないと、「ふざけた町だな」みたいに捉えられてしまうかもしれないんですけど、反省を踏まえ、東日本の状況も見ながら、「じゃあそれで故郷を諦めてしまうのか」という思いがやっぱりあるんです。「震災前過疎」という言葉をうちの町から発信して



畦地 和也さん

います。東日本大震災後の過疎は余りにも酷い。仕事がなくなり、町で暮らしたくても暮らせない人達が沢山いるという状況です。それに対して、「想定が出ただけで、故郷を諦めてしまうのか」という思いがあって、そういう言葉を発信しているわけです。



友永 公生さん

そういったこともあって、今では、「産業を作り、仕事を作ろう」ということで、防災の町で働く場所を作っていこうとしています。子どもたちが出て行

ってしまう構造は、なかなか改善できないんです。大学もないですし、どうしても一旦は出て行く必要がある。出て行った方がいろんな社会的な要素が身に付いて帰ってこられるので、それは否定するものでもないんですけど、帰ってくる仕組みがなかった。というところで、そういった仕事を作るという意味で、産業興しをしているわけです。

私の子どもは地元の大方高校の1年生なんですけれど、これまでは中学を卒業すると八割方は地元に残っていました。悪いときでも七割方は残っていました。ところが、今は半分以上が高知市内とか町内から通えない学校に出て行ってしまったこともあります。子どもたちが少なくなることが加速度的に起こっている。地域社会として、最も重要な財産を失っているのではないかと正直危惧しています。せっかく地域で育んだ子どもたちが他所へ出て行ってしまう。ただ、その流れを否定するだけではなく、帰ってきたいと思う魅力的な町作りをしていく必要があるというところで、自分たちの仕事は本当に重要な内容だなと思っています。

私は一つのバロメーターとして、今ベンチャーで立ち上げたばかりの缶詰工場に、自分の子どもを就職させたいと思っています。町長に「ちょっと裏口から入れてくれないか」とお願いしないと入れないぐらいに、いい会社にしていく。それが一つのバロメーターかなと思っています。そんな感じで、本当に手探りの取り組みをしている町です。皆さんの意見を頂きながら、「このやり方でいいのか」、「どういうやり方がよりいいのか」をこの場で意見交換できたらと思っています。

片田 ここまで黒潮町のこれまでの話をしてきました。日本一の津波の想定を突き付けられたときに、この町はへこんじゃうんじゃなくて、「負けるか」と言って立ち上がり、そして缶詰工場を作り、日本一の津波の町を日本一の防災の町にしようとしている。そして「絶対に犠牲者を出さない町にするんだ」という思いのなかで、これまで900回も役場と地元の方々が議論し、いろいろな取組を行っている。延べ数で人口の4倍くらいの45,000~46,000人が参加しているということは。一人少なくとも4回くらいは何らかの取り組みに参加している。地域は災害に向かい合うということにおいて、ここまで明確な行動を取れるようになってきている。今、地元の方々や役場の方々とお付き合いしていても、全然暗さがないんですよね。「日本一の津波の町は、今さら他には譲れんぞ」というくらいの勢いがある。「絶対に負けない町にするんだ」という思いを、町民そして役場が共有している。その中で、今、子どもたちが育まれている。ということで、ここから教育の方に少し話をシフトしていきたいと思います。

まず、あの想定突き付けられた当初、その頃の子どもの直後の様子はどうだったのか。坂本教育長、あの直後、子どもたちはどうだったのか。また教育長として、それをどうご覧になったのかをご紹介頂けないでしょうか。

坂本 まず想定があったときの教育委員会の状況をご紹介します。町長からの話にもありましたが、あの想定は、想定外の想定というイメージでした。34.4mという数字は、防災教育で子どもたちを救えるのかどうかよりも、町がなくなるという状況です。冒頭でも申しましたが、子どもたちのほとんどは低いところで生活しています。そういう状況ですが、子どもたちの命を救うということまでで



坂本 勝 教育長

きるのかなと感じました。もちろん学校の先生方も同様だったと思います。教育の中で、「この子どもたちの命を救うことができるのかな」という同じ思いだったと思います。

だから、普通の事をやっても駄目だということで、当時の高知県が出した避難訓練の回数、防災教育の授業時間数の2倍をお願いしました。それでも子どもたちの命が救えるのかということに、私は自信がありませんでした。学校の先生方も同じであったと思いますが、その辺りは、その当時からおられた校長先生方に、学校の状況なんかもお聞きしたいと思います。上川口小学校の前田校長先生、お願いできますか。

前田 上川口小学校の前田と申します。想定が出たとき、私は、現在は休校になっている伊田小学校にいました。想定が出たとき、津波の映像などは確かに頭にはあったんですけども、数字でこられても何かピンとこなかったというのが第一印象でした。たぶん子どもたちも、それまでに見た映像などからイメージはつかむことはできたとしても、実感はわかなかったんだと思います。そのあとは、「もし想定通りの津波がきたら大変だ」ということで、頭にあったのは「それ以上のところに逃げる訓練をしなければ」ということだけでした。だから、避難訓練を東日本大震災以後続けました。毎日8時から朝マラソンをやっていたので、毎週金曜日の朝マラソンを避難訓練にあてました。四十数メートルのところまで毎週駆け上がる訓練をしました。子どもたちはそれを素直に受けて入れて、訓練をしました。もちろん授業でも知識的な学習もしてきました。

けれど、あるとき、ふと思ったんですね。海から600mくらいの距離にある学校でしたから、高台に上がると、太平洋の素晴らしい光景を見下ろすことができるんですね。何度も訓練していて、ふっと早朝の太平洋のその美しさを見たときに、はっとしたんですね。「怖いから逃げろ」、「津波が来たら大変だから、とにかく逃げろ」と毎日毎回言ったことによって、私は子どもたちに恐怖を与えているんだろうなと。ことさら恐怖を与えて故郷を否定して、いずれこの子どもたちが大人になったときに、「本当にこの地域を愛して暮らすことができるのかな」と。ふとそう思ったんです。「これは違うな」と思い始めて、もう一つ認識を持たなければいけないと思い始めたんです。「自然と共存していると、ときに自然は刃を向いてくる。そのなかで共生していかなければいけないんだ」という認識も、同時に持っていかなければいけないと。「怖い」、「逃げなければいけない」ことはわかってますけども、それだけでは駄目で、転換していかなければいけないと思いました。それで、子どもたちと一緒に太平洋に向けて大声で叫ぶようにしました。最初は「ヤッホー」でやっていたんですけども声が伸びないので、そのうち「おーい」という声で叫ぶようにしました。これによって、美しい故郷の海の光景を目に印象付けてもらおうと思いました。単純なことですけども、危険なところから避難するという気

持ちと同時に、日常的に故郷の美しさを感じ取ることがセットにするようにしました。今、上川口小学校に転任していますが、そこも避難訓練のときには同じように続けています。



前田 浩文先生

先ほど思想と言われていましたが、子どもたちは教師の思いでそのまま進んでいきますので、やっぱり我々の思うところがしっかりしてないといけないと思います。思想作りというのは、今日この場で

いろんな話をしながら、これからやっていかなければならないんだろうなと思います。自分もまだ迷いがあります、「果たしてこの防災でどれだけ効果的にできるのかな」と。今まで人権教育であり道徳教育であり、様々なことで同じように自尊感情を育てることをやってきています。さらに防災教育の切り口でどうできるのかということが課題なんですね。自分の中でまだ消化されてない部分がありますので、今日はそこで勉強していきたいと思います。

片田 校長先生、子どもたちは、当時やはり怯えているような状況はあったのでしょうか。

前田 いや、表情にはそれを見せていませんでした。しかし、中には避難訓練の J-ALERT の放送がある度に、最初は泣いてしまう子もいました。上川口小学校には今もいます。そういった非常に感性の高い子どももいるということだと思います。それぞれ子どもたちは心が違いますので、だから放送があるだけで、びびってしまうという子どももいます。当時も恐怖というよりも、「とにかく逃げなければいけない」と、純粋に子どもたちは、我々の言う事を聞いて訓練をしていたというところですね。

片田 役場の方々は確かに“思想”らしきものを持ってですね、「こんなものは、所詮想定よ」。「次の津波は想定通りとは限らないし、どんなことだってあり得る」。「だから脅しだけではなくて、この町のいいところを意識していく」というように、役場の中では思想固めはできているように思うんですね。一方で、黒潮町の現場の先生方は、そこまでの思いで子どもたちに向かい合うことができているのでしょうか。

前田 もちろん、防災に限らず、今までもいろんな場面で、たぶんやってこられたと思います。だから、これを機に、どういうふうに逆手に取って前向きにやっていくかという。先ほど言ったように、自然という刃、それと共生していくなかで、「これだけ地域は美しいんだよ」、あるいは「地域ってのは素晴らしいんだよ」というところをどのような切り口で探っていくのか。そういったところをやっていく必要があると思います。そして、我々がそういうふうに向いていければ、子どもたちもそういうふうに向いていくだろうし。

ただ我々には人事異動がありますので、ずっと黒潮町にはいるわけではないです。だから、その思想が続くかどうかです。町の思想はもちろんわかっています。けれど、それが現場ですっと続くかどうか。続けていくことが一番のネックじゃないだろうかと思っています。

片田 もう一言。先生方はそれを頭では理解され、そしてその方向に向かおうとされていることはわかるんですけども、子どもたちはどうでしょうか。全体を客観的に見たときに、子どもたちは、「こんなもんには負けるか」とか、地域の良かれところと災害の危険性の両方をちゃんと向かい合と、「その日そのとき、しっかり逃げればいいんだ」というような、少し心を軽くすることができているかどうか。この辺りはどうですか。

前田　そうですね。そのところがやっぱり我々の指導力になってくるんだろうと思います。実感として、子どもたちはそこまで感じているのかというと、正直難しいですね。「負けるか」という捉え方は、「来るんだ」という事実があって、それに対して「負けるか」となる。だから、「来るんだ」という認識が、どこまで子どもたちの中でリアリティがあるのか、ということなんですよね。戦争平和についてもそうです、リアリティの問題。そういった部分は子どもたちを教える側として非常に難しさがありますね。

一方で訓練をすることによってイメージ力は確かに湧いたんですね。友永さんに来てもらって、クロスロードとか HUG とかをやって、「この場面ではどうするか」という迷いを通じて、イメージが芽生えてくる。そういうところでは、子どもたちの中に、決して否定的ではなくて、前向きな気持ちというのは育っているようには思いましたけどね。まだまだ十分ではないので、片田先生が願っているような、「これくらいの想定で負けるか」というようなところまではまだいってないとは思いますが。これからだと思います。

片田　ありがとうございます。中野先生、どうぞ。

中野　三重県尾鷲市から来ました中野と言います。これまで、行政の立場とか、あるいは校長先生、管理職の立場から、学校の様子を話して頂いましたが、地元の先生方も沢山参加されているので、個人的な意見でも気持ちでも結構ですので、津波想定が出たときのその思いとか、それからその子どもたちに接する中で、どういった様子だったか、あるいは教育を進める中でどう変わってきたか、ということを経験の立場で聞かせ頂きたいと思います。



中野　敬太先生

宮川　大方中学校の宮川と言います。釜石二回行かせて頂いて、和歌山にも行かせて頂きました。大方中学校が地元で、大方中学校のすぐ下に家もあります。津波が来たら、たぶんないんじゃないかなってということで、高校三年生と大学一年生の子どもや家庭とも話をしています。「お父さんとお母さんはおいて逃げるから、自分のことは心配しないでくれ」と高校生の子どもは言っていました。



宮川　昭二先生

想定がでたときですが、自分たちにはあまり数字が入ってこなかったかなというところがあります。実感が無いなというところがありました。2年前に地元の方大中学校に赴任して来ましたが、その後に釜石に行かせて頂いて、釜石の実態を見させて頂いた後に、「これでは駄目なんじゃないかな」と思いました。数字だけではなかなか実感が無いというのは、他の先生方や子どもたちにもあるんじゃないかなと思います。自分は釜石の実態を見て、それを受けて、自分たちで考えて授業を作ったりとか、子どもたちに実感を持たせるようなことをやらせていこうかなと考えていきました。

防災主任をやっていますが、一年生はやっぱり「どういうふうに逃げるか」から入って、二年生で南海大地震などの過去のことを学んで、それを繋げていって、最終的に三年生では、町

長さんも言われたように、例えば都会に行っても、避難者率先して避難できるような子どもたちとか、地元を離れたとしても、地元のためになることを自分で考えて行動できるような子どもたちを育てていくことが、最終的には一番大事ななと思っています。実際には外に出て行く子どもが多いのですが、また帰ってくる子どもたちがでてきたらいいなと思っています。自分の子どもも黒潮町が好きなので、最終的には帰ってきたいと言っております。そういう子どもを増やしていくことが、防災教育の良さかなと思っております。

片田 防災教育は論点がいっぱいあるので、いろんなところに議論がいくんですけども、今度は端的に伺いたいんですけども、黒潮町の子ども、次の津波が来たときに、現在、自分の命を守れる子どもになっていますか。町長はどうお考えですか。

大西 先ほど、前田先生からもありましたけども、決してゴールに到達しているということではないと思っています。ただ、少なくとも前には進んでいるという実感はあります。

今職員としてご活躍されていますけども、新想定が出た時に大方高校の生徒さんだった酒井君の意見を一番聞きたいかなと思います。

酒井 大方中学校の事務の酒井と申します。東日本大震災が起きたときに、僕は高校 3 年生になる前でした。そして新想定が公表されたのは、就職する直前だったので公表された時は、「もう何をやっても駄目なんじゃないか」と思いました。今は就職して、こういう研修会や防災教育にかかわっていくにつれて、以前よりも前向きにはなっています。



酒井 健太郎さん

大西 ごめんなさい、むちゃぶりしてしまいました。

地区防災計画シンポジウムで発表頂いた田ノ口小学校の児童を生徒の発言を聞いていると、少なくとも新想定が出てバタバタしていたときの状態よりも、はるかにステップアップはされているかなと思っています。ただその進捗のスピードが、今のままで及第点が頂けるスピードなのか。その判断は、学校の現場の先生にお伺いしてみないとわからないところですけども。少なくともステップアップはしていると思います。

片田 何で防災教育をやっているかという、いつどんな大ききで起こるかかわからないわけなんですけど、やはり子どもたちが絶対に生き延びられる、ちゃんと逃げることができて、ちゃんと自分の命を守り抜くことができるような子どもたちになることが、少なからず我々のアウトカムですよね。それは、是が非でも勝ち取らなきゃならないわけですね。そこに向かって黒潮町は歩いていることはわかりました。その進捗はまだまだかもしれないんですけども、そこに向かって動いているんだろうということはわかったんですね。

ただ、どうしたら本当に一生懸命逃げる子になるだろうかって。そのためには現場の先生方は、どういうふう子どもたちに向かい合えばいいのか。前回の田辺でも議論になったんですけども、学校だけではどうにもならない。黒潮町はこれだけ役場が一生懸命になって動いていますよね。他の役場と比較しても、どこの役場よりも意思統一ができていると思うんですね。34.4mの日本一の津波想定に役場が向かっている。そして、先生方も一緒に足並みを揃えておられる。その中で、子どもたちは本当に逃げられる状態に向かっているのか。まだまだ十分じゃないかもしれないけども、向かっているでしょう。でも、こんな年末の忙しいときに、こん

なところに来ている皆さんは、とにかく勝ち取りたいわけですね、その日を迎えたときであっても、絶対に死なない子どもたちになることを。そのために何が必要なのかを今日は議論したいわけです。実際に実効性のある防災教育というのは何なんだろうか。その際に地域はどうあるべきなのか。地域との連携はどうあるべきなのか。ということが今日の主たるテーマなわけですね。

黒潮町の置かれている状況はわかってきました。これまで防災教育をやってきて教育委員会として、今の状況をどういうふうに見ておられるのか。そして、どうしたらその実効力を高めることができるのか。非常に漠然として非常に難しい課題なんですけども、教育委員会から今思っておられることをお願い致します。

畦地 教育委員会というよりも、僕の個人的な考えになろうかと思えますけども、僕は、もし今揺れたとしたら、子どもたちは逃げられると思います。ただし、その子が10年後、例えば25歳になったときに逃げられるのかというと、それはまた別の話になります。というのは、「何のために逃げるのか」というところが、子どもたちにしっかり根付いていないのではないかという不安があります。知識としては、「揺れたら逃げる」ということを子どもたちはしっかり受け止めているので、今は家庭でも逃げようという行動をとると思うんです。けれど、10経ち20年経ったときに、本当にその真剣に逃げる行動に繋がるのかなと。今まだ僕の中ではちょっと不安です。

片田 何が阻害要因なんですかね。確かにまだ知識のレベルで、学校で先生方が熱心に教えておられることを子どもたちは素直に理解し、「逃げなきゃいけないんだ」という知識を持っている。でも、それは、10年経ち20年経ったときになくなるんじゃないか、という不安を畦地さんは持っておられるわけですよね。それは、「身に付いてない」ということなのか。単なる知識のレベルにとどまっているということなんですかね。

畦地 それは、先ほど前田先生がリアリティというお話をされました。例えば戦争のことを子どもたちに教えるときも、リアリティをどれだけ持っているか。つまり、「戦争はいけないよね」ということは頭でわかったとしても、じゃあ本当に「戦争を防ぐ行動を取れる大人になれるか」というのはまた別の問題というのと似ているのかな。つまり、そのときに学んだことは知識として、何となくちゃんとわかっているんだけど、リアリティがないままそこを過ぎていくと、大人になったときに本当にそれをいかせるのかなと。リアリティを欠けたまま勉強をしても、今はちゃんと正解ができた子どもたちでも、将来の正解に繋がるのかというのは不安です。

片田 そこで言うておられるリアリティっていうのは、おそらく『34.4m』に対する具体的なイメージということですよ。でも、そんなものは単なる計算結果です。実際には、どんなことが起こるかわからないので、そこで言うているリアリティって一体何なんだろうかと。そのへんはどうですか。

畦地僕は、究極は『命』だと思います。自分の命が今日失われるかもしれないことに対してリアリティを持つこと。それから、友達が亡くなるかもしれない、家族が亡くなるかもしれないということに対して、リアリティを持てるかどうか。やっぱり命が失われるということに本当にリアリティを持てたら、何とか防ぎたいと思うのではないかな。それは頭ではなくて、必然的に無意識でも行動に繋がることになるのではないかなと思うので、やはり僕は、命の大切さというところに究極は行きつくのではないかなと思っています。

片田 確かに、釜石で一番効果があったのは、「先生は皆は逃げると思うんだけど、皆のお父さんやお母さんはどうするだろうか」。「迎えに来ちゃうよな」と言った瞬間に子どもたちにリアリティが出てきた。津波のリアリティではないんですよね。日常親から言わずもがなで受けている愛情が、「お母さんが迎えに来ちゃう」、その後に想起されることに対するリアリティですよ。やはり命に対してのリアリティですよ。そこに気付いたときに、子どもたちに本当の「逃げなきゃ」という気持ちが出てきたように思うんです。僕もそのリアリティっていう問題は、畦地さんの言われた通り、「命」に対するリアリティだと非常に理解しますし、その通りだと賛同も致します。防災教育の中で効果をあげている多くの事例は、津波のことをどれだけ詳しく教えたかという教育ではなくて、「家族の中での自分の位置付け」とか、「津波が来たときに地域のおじいちゃんやおばあちゃんたちはどうなっちゃうんだろう」とか、「保育士さんが数人しかいないのに、隣の保育園の子どもたちはどうなるんだろう」とか、僕の見てきた現場は、子どもたちに“命のリアリティ”を持たせる教育なんですよ。 “命のリアリティ”が実効性のある行動へと導く第一歩になっているように思うんですよ。

会場からでも結構なんで、ご質問なりご意見なりありませんかね。

宮田 高知市の城西中学校から参りました宮田と申します。今日、午後発表させていただきます。どうぞよろしくお願い致します。今日のお話を聞いておまして、素晴らしい内容でございますけれども、もう一つの手前の原点の部分が気になります。私の前任校は、高知市の潮江中学校でした。潮の江と書くくらいですから、完全に低いところでございます。3.11があって、5年間、今のところ、まだ映像で見たあの津波のリアリティが頭に残っているのですが、そのリアリティによる防災教育は継続できるのかなというところにちょっと危惧するところもあります。



宮田 龍先生

というのは、最初、潮江で防災の話を始めたときに、ほとんどの人が「南海トラフは100年後には必ず起こるんだ」と知識としては知っておりました。しかし、高知市内で開催される防災に関する講演会などの会場に行きますと、ベテランの方ばかり来ているんですね。そして、毎回ほとんど同じメンバーなんです。そして、話をして、仲良くなってから、「校長さん、あなたは南海トラフの構造は知っていますか」と聞かれたんです。「海溝部でプレートが跳ね上がって、地震と津波が起こってくる」「そういう中で、こういう大きな地震が東北でも起こった」、そして「歴史的過程の中でも、100年おきにこういった形で間違いなく来ますよ」という話を何回も話をしましても、最終的には「本当にそれ見たことあるのか」となる。リアリティを感じていないんですね。

「本当に来るのか」という一番最初の原点でしっかり話をしていなかったら、逃げる前の段階で、諦める前の段階で、うまくいかない。私が、中学生に一生懸命話をしてみると、知識としては理科の授業や社会科の授業で明確に教えてくれておりますし、3.11のあまりにもショッキングな映像が頭に残っているので、すぐにすんと入っていく。しかし、明日来てもおかしくないですけども、10年経って20年経って、30年後くらいに発生する確率が高いという状況に

対して、文化としてリアリティを継続してきちっと教えるための工夫がどこまでできているのか。例えば、昭和の南海地震の聞き取り集を一生懸命つくっているところがありましたら教えて頂きたい。それから、今までの実践例では、昭和の南海地震のときに、ここまで津波が来たよという石碑があることは調べられている。じゃあ、それを見ながら、どういうことを子どもたちに訴えていたのか、とか教えて頂きたい。

それから、私はリアリティをずっと持つていくための工夫が、教職員としては必要じゃないかなと思います。それがあって、諦めない教育があって、そして次長さんが言うように、郷土の自信と誇りを持つ。綺麗な高知市だけではないかなと思っています。日本はどこ地域も、何度も地震や水害やいろんな災害によって被害を受け手、そこからたくましく復興してきた場所なんです。潮江で教えていたときは、「ここが嫌になる教育」ではなくて、「私たちの先輩は復旧復興してきた」「少しでもそれを見習って頑張っていこうじゃないか」とか、こんな気持ちで教えました。

黒潮町のここ3、4年の実践というのは、大きい内容があるんじゃないかなと思いますが、一番最初の障害をどのように行政の方が克服していったかなと。マスメディアのおかげで、多くの方は「もう来る」という意識でいますけれども、中には「いや違う」という方も私はいいます。実際いました、「いや、本当に見たことあるのか」という感じで。どんな実践を起こしていった子どもたちが生き、そしてまた将来に向かっていくのかというような形を教えて頂いたらありがたいかなと思いました。

片田 ありがとうございます。それはそうですね。備えるべく存在をしっかりと認識できることがスタートだということ、その通りだと思います。そのへんも重要ではあるんですけども、今日の議論の目途としているところとして、“単に逃げるという教育”だけではなく、“防災教育の可能性”みたいなところを少し議論の中に入れていきたいという思いもあります。すみませんが、時間の関係もあるので、話をすすめさせていただきます。

「子どもたちが一生懸命逃げて、命を守れる子に育みたい」という思いに対して、ここまで議論の中で、もちろん現象面でのリアリティがなければ話にならないんだけど、それがあつたうえで、さらに“命に対するリアリティ”を意識するようになったときに、本当の行動力が出てくるところまでは、コンセンサスが得られているところだと思うんですね。

一方で、その過程で子どもたちに様々な変化も出てきている。その一つの例が能登の小木中学校だと思います。今日は小木中学校の大句校長先生に来て頂いております。これから少し、小木の話をお聞き頂きたいと思います。小木中は東日本大震災以後、防災教育を一生懸命やってこられました。それ以前は、ざっくりばらんに申し上げると、八十何校ある石川県の中学校の中でも、学力は八十何番という学校であつた。ところが、防災教育をずっと続けていく中で、県下の実力テストで今回一番になったそうです。もちろん先生方が熱心に教科科目を教えられた成果だと思いますが、おそらく原因はそれだけじゃない。防災教育との関わりの中で、そのような結果があるように思えるんですね。その本質はどのへんにあるかということも含めて、まずは先生の方から、ここまでの軌跡みたいなものをご紹介頂ければと思います。

大句 5年前の3月11日は、うちの学校は卒業式をしていました。そのとき。私は教頭だったんですけども、とにかく「ああ、怖いな」という思いと、「こんなことはあつていいものか」という思いでテレビを見ていただけでした。その年の4月1日に、ここにおります小川先生が校

長校として本校に赴任して参りました。小川先生は能登半島地震を経験していて、家がぺちゃんこになっているのを見てまわり、自分のビデオで映したりしていました。そして、赴任してすぐ、東日本大震災のときに現地に入られた消防士さんをお呼びして、子どもたちに話をしてもらったり、避難所運営をされた方を連れてきて、講演をしていただいたりし始めしました。最初、私は「何をするんだ」と思



大句 わか子先生

っていたんですけども、凄く熱い。そんなときに、小木地区もある新聞社から名指して、「リアス海岸なので、M7.2の地震で小木港に9分で18mの津波が来る」という記事がでました。「こういう災害はどこで起こるとも限らない」ということで。「うちの校長は突拍子もないみたいな気がしたけど、そうでもないのかな」と思い始めました。他の職員も私と一緒に戸惑っていたのですが、その中で、今隣におります廣澤は、「やってみる価値があるんじゃないか」ということで、すぐにいろんな教育活動を始めました。

私は国語の授業を担当していました。国語の中に「小学生にわかり易く教えよう」という単元があるのですが、「今、中学生が小学校に教えることって何だろう」と思ったときに防災を取り上げました。本当に拙い内容でしたが、「津波の起こり方」とか「今避難所に避難されている方はどんな思いでおられるのか」をネットや新聞で調べて、それをグループ毎にまとめまして、小木小学校に行って、子どもたちが小学生に発表するという授業を展開しました。

その授業に参加したのは、当時小学校4年生の子たちで、中学校に進学したあとは、廣澤が1年生、2年生と担任して、現在3年生になっています。先ほど、片田先生から、学力が上がったという話を紹介してもらいましたが、どの学年も高いってわけではないんです。今の3年生は学力が高いんです。で、この5年間の活動を整理をしたら、「この子たちだったんだ」と気づきました。この子らは、先輩たちの思いを純粹に受け止め、避難訓練などを行っています。「地域には、昼間は僕たちと小学生と保育園児、そしてお年寄りしか居ない」、「じゃあ、助けるのは僕たち中学生しかいない」という思いを持った先輩の思いを受け継いで、中学校が主導権をとって、町の避難訓練をこれまで5回実施してきています。小木地区の集落は海面すれすれのところにあり、そこから42mの高さにある本校まで急激に上がるような地形になっています。子どもたちが「どうか中学校小学校に逃げてください」と呼び掛けると、町の人も参加してくださる。そして、足腰の弱い方に対しては、子どもたちが手を引いて、あるいは「こっちですよ」と誘導したりしています。こういう活動を5年間してきました。最初は300人の参加だったんですが、その後、私が一時別の学校に異動している間に、小川校長が大々的にいろいろやって、850人が参加したこともありました。町の人口は1900人程度なので約半分の人が、実際に中学校小学校に上がってきてくださいました。その活動をする中で、子どもたちは地域の方から「ありがとうね」、「良かったわ」、「あんた、上手いこと誘導するね」、「今日も会えたね」などと声を掛けてもらえます。

それから、「もっと小さい子どもに津波の怖さなどをわかってもらうにはどうしたらいいだろうか」ということで、廣澤が先ほどの学年を担当していたときに、『防災カルタ』を作りま

した。「ぬいぐるみ、それは避難に必要なの」とか、50音順で作りました。それを保育園に持って行って、一緒に楽しみながら防災意識を高めてことをしました。

それから、『防災体操』も作りました。歌を作って、その歌に合わせた体操を作りました。体操は、自分たちだけでなく、被災地へ何度も行って、『寄り添いプロジェクト』に参加している大学生と一緒に作りました。それによって、「僕たちだけじゃなくて、大学生もこんなに一生懸命考えてくれた」「大学生が僕たちを引っ張ってくれて一緒に作ったこの体操は、地域に広めなければいけない」という意識を持つようになりました。今年は、お声がかかれば出かけていって、出前講座みたいなことをするようになりました。子どもたちは全然嫌がりません。

「夏休みだけど、校長と一緒にバスに乗って2時間程かかるところまで出掛けてくれる人」と声をかけると、3年生は全部18人なんですけど、14人くらいは「いいよ、お昼何かおごってね」って言って、一緒に行ってくれます。そして、他地域の方に、「僕たちはこういう防災の活動してます」という発表までしてくるようになりました。

そうすると、“張合い”のようなものが出てくるのでしょうか。先ほど、國友さんが紹介されたように、自己有用感が高まり、その結果、「もっとこれができるようになりたい」、「もっと知りたい」と思うようにいろいろな意欲が高まった。その中で、“学習意欲”もあがった。この学年の子たちは、たぶんもともとそんなに悪くなかったと思うんですが、凄く上がってきた。4月の全国学力学習調査では一番ではなかったですけども、この前行った調査では本当に一番になりました。「石川県一位」というのは眉唾にしておいて頂きたいのですが、地域の中では間違いなく一位になりました。じゃあ、私たちが「何をしたか」じゃなくて、子どもたちが自分自身で学びたいとより思うようになった。それは、家庭学習時間にも表れていて、ともて沢山します。それから、この前の期末テストの平均点もすごく高かったです。

本当によく頑張っていると思うんですが、「今年になって、私たちは新しいものを何も開発していない」、「今年はちょっと活動が足りないように思う」と子どもたちから声が出ています。「あなたたち、受験があるのに、そんなことして大丈夫？」って声をかけるんですけど、「そうですね」って言うんですが、「もうちょっと何かをしたい」という意欲のある子ども達に育ったのは事実です。

片田　、「避難訓練をやりました」とか「小学校の子どもたちに防災教育を中学生がやりに行きました」とか「こんな授業一生懸命やっています」とか、そういう話はどこの地域、どこの学校でもそんなに変わらないんですよ。「そういうのを一生懸命やりました」ってだけでは、そういう子どもは育まれないと思うんですよ。もちろん、避難訓練を繰り返せば、早くできるようになるでしょう。子どもたちが保育園や小学校行って防災教育をやれば、教えられた子どもたちに知識はつくでしょう。でも、子どもたちがここまで前向きになり、そして内発的な防災だけではなく、様々なことに対して凄く一生懸命やるようになって、今や学力の向上まで図られるようになった。おそらくこの影響は、目に見える学力だけではないと思うんですよ。

そこで、大句先生、そして小川先生、廣澤先生にも伺いたいですけど、「防災訓練をやりました」って話ではなく、その根底に何が子どもたちをそう導いたんでしょうか。現に小木中学校では、“動く子ども”、“一生懸命行動するような子ども”が育まれている。それは、避難訓練をしたからではない。じゃあ何なんだ。僕は、黒潮町の子どもたちにもそうなってもらいたいわけですよ。先生方もそう願って今も一生懸命やっておられる。その先をいく良い例と

して、何がそのポイントになっているのか。これまでやって来られて、先生はそのへんについてどのように感じておられますか。

大句 教員からの働きかけだけでは、“やらされ感”がとても強いと思うんです。そうではなくて、「今度こういうことを解決したいんだけど、どうしたらできるか」ということを子どもたちに、人数少ない学校なので、縦割り班で話し合わせたり、子どもたちの意見から吸い上げていくということはやっております。また『小木防災の日』というのがありまして、子どもたちがそのチラシを近所に配りながら、「こんなのがあります」、「また一緒に活動してください」という呼びかけも行っています。

片田 その「呼びかけた」ということも。行動としてはそういうことだというのはよくわかるんですね。でも根本は、先生と子どもたちの間のコミュニケーションとして、何が子どもたちを動かしているのか。おそらく、「小木ではこういうことをやりました」とこれまでやったことを箇条書きにして、それを他の各学校でやったとして、必ずしも小木と同じような子どもたちにはならないと思うんです。やった項目のリストに沿ってマニュアルのようにやっても、小木のような子どもが育まれるとは思えないんですね。

とても難しい質問なんですけども、「子ども達を動かしている」、「子どもたちをそういう気にさせている」、「そこまでの思いにさせている」、それは子どもたちとの向かい合い方において、何がコミュニケーションのポイントになっているのか。どうして子どもたちはそんなに動くようになったのか。廣澤先生は、子どもたちにどういう姿勢で、どう指導されているのか、そのツボを教えてください。

廣澤 先ほどから、“命のリアリティ”という言葉が出てきていますけど、教師が子どもたちにリアリティ持たせられるかと考えたときに、自分自身もそんなことを経験してないし、子どもたちにも経験させることができません。だから、先生方がいろいろと議論されていますけど、自分は「子どもたちはリアリティを持たせられないな」と思っています。そんな力は全然ないと思っています。



廣澤 孝俊先生

「じゃあ、どうしていくのか」というところで、自分の中で一番大切にしているのは、防災教育では、「とにかく地域のことを大切にする子どもたちを育てる」、この一点だけです。「じゃあ、どうしたら、子どもたちはその地域のことを大切に思ってくれるか」と逆から考えていって、「地域の人たちと子どもたちの繋がりを沢山作ってあげたい」とかなという発想がでてきた。じゃあ、どうして作ってあげたいのか」となったときに、いろいろな活動を企画し、いろいろな年代の人たちと子どもたちが一緒に活躍する場面を教師側が作っていく。ただ作っていくだけでは、子どもたちも活動して終わりにになってしまうので、ここで学校現場でよく言われる“評価”というのがすごく大切になってくると思っています。この活動に対して、「地域の人たちがどう思っているか」、「自分たちはどう思ったのか」、「先生たちはどう思ったのか」、それをきちんと気付かせてあげないと駄目だと思います。子どもたちが「そうなんや、そうだったんや」と絶対にわかる場面をつくる、そういう活動が必要だと思っています。それがないと、ただ活動して終わりにになってしまうと思うんですね。

次に、少しずつ意欲が子どもたちにできたところで、今度はその意欲を上手く使った活動、もう一つ上のレベルの活動を子どもたちに考えさせる。そして実践して、また反省させて、また評価して、また強い肯定感を持たせて、というサイクルを継続してまわしていくことを、もの凄く自分たちの中では意識しています。そして、その際に、同じことを繰り返すんじゃなくて、子どもたちの意欲を高めながら、自己肯定感を高めながら。ぐるぐるぐるぐるそのサイクルが大きくなっていくような、そういうイメージを自分の中では持っています。それは、「子どもたちがよりいいものいいものを」って、考える力になっているんじゃないかなと思います。

去年、いろいろな事例を参考にして、『小木中防災宣言』というのを子どもたちが作ったんです。現在、自分は他校に異動しているので、もう小木中学校にはいないんですけど、今年の3年生が、「今年は防災宣言をしないんですか」って言ったそうなんです。去年の活動が、子どもたちに「さらにもう一つ上の活動をやりたい」と思わせ、そして、そのサイクルを継続してきたことによって、そのような気持ちを子どもたちは持つことができているのではないかなと考えています。

先ほどの黒潮町教育委員会の方の発表で、最後に「生きる力」って書いてありましたが、自分たちは、それを「生き抜く力」と考えています。

片田 ここまでの話を聞いてどうお感じになったか、ご意見もしくは小木中学校の動きに対するご質問でもあればと思うんですが、どうぞ。

中平 田ノ口小学校の中平です。6年担任と防災主任をしています。今までのお話を聞いてきて、思ったこと、自分の学校が取り組んでいることを話させてもらいます。



中平 巖先生

まず、リアリティの話があったんですけど、1年生の持てるリアリティと6年の持てるリアリティと全然違うし、死に関する認識も違うんじゃないかなと思います。子どもたちに釜石に津波が来る映像を見せたときに、1年から6年までの全員が「やばい、怖い」と言っていた。それは間違いない。でも、亡くなった方がいる一方で、助かった人はいっぱいいた。だから、助かれるっていう事実に対して、自分らは取り組みをしていかないといけないのではないかなというふうに捉えています。

僕は黒潮町に来て3年目なんですけど、すごく学ばせてもらいました。例えば、「想定にとられるな」、「最善をつくせ」、「率先避難者たれ」。3年前はこれがすらすらと言葉に出せたかといえば出なかったかなと。それは、黒潮町が教育委員会が中心となって、リーダーシップをとりながら、各学校がそれぞれで取り組みをしている結果ではないのかなと思うんです。その中で防災学習をしていて、いいなって思うのが、負の面はあるんだけど、「黒潮町の良さをもう一回捕まえ直すことができる」というところです。それから、普段の学習ではなかなか活躍できない子が、防災学習の話し合いの中で活躍できる。また避難訓練で逃げるときに、下級生に優しく声を掛けてあげる子どもがいたりすれば、それを褒めてあげられる。普段の学習活動の中でもそれぞれ子どもを認めてあげられる場面っていろいろあると思うんですけど、防災学習は、子どもたちを褒めてあげられる場面が沢山あるんじゃないかなと感じました。

それから、学習と活動が連動しなければいけないということもすごく今感じています。今、田ノ口小学校では、全校で学習内容と行事との関連性を確認しています。「その学習がどういう行事でいきってきて、子どもたちがどういうことをそこで得ていけるか」ということを確認できるところが、よい部分じゃないかなと思っています。

片田 皆さん、いろんな試行錯誤をやっておられます。どれもこれも悪いことではない。どれも大事なことなんですよ。ただ、廣澤先生の話をついて思うのは、その“連鎖”、つまり、地域のことを考えた活動の場を与え、その成果が上がったら、地域から評価を受ける。そして、子どもたちが評価されていることを実感することで、彼らの意欲が高まる。さらに次の活動として、成果が上がったことを繰り返すのではなく、その成果の上にさらに上乗せする活動を考え、実践する。そして、また評価され、それを実感し、意欲を高め、と繰り返していく。このサイクルの中で、先生が仰るように、それぞれの子どもの持っている“いいところ”を様々な形で褒めてやることができ、そしてそれが皆の活動の推進力になる。その結果として、地域に貢献できる子どもたちが生まれ、学校全体として見ると“地域に貢献できる学校”になる。このように自分の存在を肯定する場を連続的に与えていっていただけるなという感じがするんですね。

今日、ここにお集まりいただいた先生方の地域は、どこもここも一生懸命やっておられます。しかし、学校が孤軍奮闘している状況、もしくは先生が個人で奮闘しておられる状況が少なからずあると思うんですね。一方で、小木の場合は、それが一つに繋がっているように思うんです。先ほどのサイクルの中で、活動が次のレベルへと上がっていくという意味で“繋がっている”という面と、その活動を行う際に、学校や地域という組織間で、またそれぞれの先生方の個人間で、皆が手を組んでいるという意味でも“繋がっている”と感じるんです。

まだそういう面で、それぞれの地域で実情が違います。一人一人の先生方は皆、その思いがあって一所懸命やっておられるんだけど、一人で疲れちゃってる先生。学校の全体の動きになっていかないことに対して限界を感じておられる先生。そして地域との関わりを持つことが大事だという認識は、おそらく皆さんお持ちなんですけども、一人の教師が個人でそれだけをやることの限界。これらについては、個々の先生方を学校がサポートして下さる、教育委員会がサポートして下さる、役場がサポートして下さる、というような動きがあれば、改善の方向に加速していくであろうと思います。おそらく、小木は小さな集落ということもあって、それができているという側面もあるんだと思うんですけども、何かそのへんが大きなポイントになっているような気がします。

大句 先ほどの自己有用感かどうかわかりませんが、子どもたち自身も「自分のはびた」と実感しているんだと思います。「より良い方に向かっている」、「自分のためにも良かった」と。

さらに“繋がり”については、町内の中学校間の繋がりができています。今年、能登町の危機管理室が、町内の全ての小学校を対象に町全体で避難所開設訓練を実施したいとのことになりました。そこで、町内の4つの中学校の生徒が、それぞれの小学校に行って、中学生主体で訓練を実施してくれ、ということになりました。他の中学校の校長さんの中には、「小木みたいにはできない」と言われた先生もいたんですが、「いや、できることからやりましょう」ということで実施することになりました。そして、訓練を実施する前に、隣の能登中学校に異動していた廣澤から、「小木中学校の生徒にこれまでの取り組みを、隣の中学校の生徒に対し

て発表してもらいましょう」という提案がありました。そこで、去年まで小木中学校の教頭していた先生が隣の中学校の校長になったので、もう一校、そこにも声を掛けました。そして、他校の生徒を集めて、「小木中もそんな大きなことをしてきたわけじゃなくて、こんなふうにして避難した人に声掛けたら、こんなふうになったよ」という話をしてくれました。このような場を少しずつ広げていこうとしています。もう1校にも声を掛けたんですが、その校長先生が「自分はいいわ」と言われれば、深追いせずに、また次の機会で思っやっています。

行政の人は発案だけして、「あとは学校現場でなんとかしてください」という無茶ぶり状態でした。でも、逆にこの無茶ぶりを引き受けたので、今度、小木中学校の体育館をLED化することになったのですが、その予算は教育委員会じゃなくて、危機管理とか総務の方から出てきていたりしています。こんなふうに恩を売りながら、ゲリラ的な広げ方をしています。

片田　ゲリラの創始者である、小川先生。非常に上手くいっている一つのケースだと思いますが、先生方がここまでもってこられた、最初のとっかかりのところに関わっておられる小川先生は、どのように感じていますか。

小川　大句先生、廣澤先生からお話が合ったんですけど、「とっかかり」という部分では、黒潮町と全く逆ですね。町には危機管理室もない、従って総務課に一人だけ担当がいたという状況した。そして、何からするか、ということで、「学校で避難訓練を一度やります」、「避難所の体験とかもやりますので、何か資材貸してくれませんか」と言ったら、「そんな物はありません」と。このような状況だったので、「自



小川　正先生

分たちが思いついたことをとにかくやってみよう」というなかで、廣澤を中心としてやってきました。避難訓練を実施して、どんなことが大切なのかがわかってきたので、中学校で津波フォーラムを開催し、そこで地域の皆さんに中学校から情報発信していきました。その際には、役場の人にも「関心あったら見に来ませんか」とお誘いをするような形でスタートしてきました。そして、活動を積み重なっていった、ついにはこちらからは招待も何もしないけど、教育長さんが防災服を着て、避難訓練を見に来てくれるようになりました。また、町長さんから、避難所体験にきている保護者の皆さんや地域の皆さんの前で「しゃべる時間を俺にくれ」と言うくらいに、少しずつですが来てくれるようになりました。

結局、「学校が何をすべきか」とかでなくて、「学校でできることをできる範囲でやってきた」ことの結果であり、逆に「今度の防災訓練に教育長としても、これだけ協力させて下さい」となってきました。そういった中で、「地域の皆さんがこれだけ協力しているんだから」ということで、県も見に来たりしました。一番大事なのは、「どこどこがすべき」ではなくて、「学校ができることをできる範囲でやる」ということだと思います。でも、「できる範囲でやる」というのは非常に乱暴ですよ。自分も「そんなことするんですか」って、よく職員に言われました。例えば、「避難所訓練を夜間にやりましょう」と言ったら、一番最初に言われたのは「勤務対応はどうするんですか」と。そのときは「う～ん、PTA行事にしましょう」というように、思いつきで対応してきました。自衛隊さんや海上保安庁さんに来てもらうのも、「一中学校が一地域のためにやるんで協力してくれませんか」とどこも通さないで、自分がダイレクトにお

願いに行きました。そうした行動の積み重ねが、今につながっているわけです。逆手なんです。町が動かないから、逆に町に「こんなんしたらどうですか」とこちらから提案した。

一番いい例が、『防災体操』です。これも最初は音楽の先生に「文化祭ですることもないし、防災の歌でも作ってよ」って言ったら、音楽の先生が「そんなことをするんですか」と。「うん。いいからやりなさいよ。」ということで適当に歌を作って、歌っていたんです。そしたら、それをたまたまある大学の先生が見つけた。そして、協力して「それを防災体操に格上げしましょう」となった。それが、お年寄りを“ほっとネットサロン”とかで使えるようになった。『防災カルタ』も作りましたら、地域の社会福祉協議会がそれに目を付けて、「じゃあ 200 セット作ります」と。ですから、学校から少し情報発信したことに、社会福祉協議会であったり、大学であったり、いろいろところが関心を持ってきて、それがこちらの想定した以上のことをしてくださる。ですので、今、自分は能登町の隣の輪島市に住んでいるんですけども、能登の社会福祉協議会が 200 セット作った小木中の『防災カルタ』を、輪島の社会福祉協議会のボランティアサークルに通じて借りてきて、それを勝手に使ったりしています。そんなふうにして、一つの学校が何か発信することを各種団体が注目している。そして、小木中学校が真ん中にいて、それらを繋いでいく。

それから、もう一つだけ言えるのは、自主防災組織です。おそらく黒潮町でも町内会単位であるかと思うんですけども、うちは、最初からそこには中学生がその協議会の一員として、他の大人と同じレベルで入らせてくれということをお願いしました。そうしましたら、ここは素敵なんですけども、能登町が「だったら 200 万円の予算をつけますんで、それでやってください」と。「こちらもノウハウがないんで、あなたたちでやってくれ」と。全校生徒 60 人の中学校に 200 万円という予算はそんな簡単につきませんね。でもそれを丸投げでした。また、町会も「中学校がやってくれるんなら協力します」という雰囲気でした。自主防災組織の結成率がたまたま遅れていただけにやり易かったです。

片田 「地域が子どもを守ろうとしている、だけど違う」、「子どもが地域を守ろうとする」と。そして、「地域が子どもを守り、子どもが地域を守る」という関係、これが大事なんだというご指摘が町長から最初にあったと思います。小木を見ていると、それができている感じがするんですよね。非常に上手くまわっている事例だと思います。

日頃、地域防災、地区防災計画づくりを一生懸命やってきているこの黒潮町で、松本さんはその推進役の責任者なわけですけども、今の小木の話聞いて、地域防災と防災教育の関係について、どのように感じていますか。

松本 60 人の学校に 200 万を渡して「やってください」と。町長に予算をつけて頂いて、うちもやってみたいですね、

10 月 31 日に片田先生にもお出で頂いて、この会場で開催した地区防災計画シンポジウムですが、この主催は町じゃないんですよ。主催は、自主防災会という設定なんです。町と教育委員会は協賛だったと思います。できるだけ地域の方が主体的に関与することができるステージがあれば、最も効果的にことが動くと思います。学校あるいは地域が主体の方が理想的であって、しかも効果は必ず出るんですね。主体はやっぱり動く子どもであり、住民の方です。地域防災も住民の方が主体に動かなければならないというところに、地区防災計画の切り口もあるわけです。

年に一度、総合防災訓練を実施しています。今年は、12,000 人の人口の町で 4,444 人が参加しました。参加率は約 37%でした。この訓練では、14 の消防団に、南海トラフ地震が発生した直後という想定のもと、各地区で模擬的に災害が起こった状況を考え、訓練時にその情報を本部に流してもらいます。そうすると、各団から様々なことが寄せられてきます。「あっちの家が潰れて、人が埋まっている」とか出てくるんですけど、災害対策本部ではほとんど対応できないです。各地域の対応は、地域であったり、そこの現場にいる方がしなければ対応しきれないというのが、総合防災訓練で必ず検証されてきました。

小木の防災教育の効果は、イメージとしては、そういう現象が出るんじゃないかと思います。防災で地域に入って行っても、反対する人が余りいないんですよ。これまで教育現場も行政も対立した意見に悩まされることが多いと思うんですけど、防災を切り口にしていくと、案外対立がないんですね。自分たちも防災カルテづくりの中で、『防災隣組』という仕組みをつくりました。田舎が特異かもしれないけれど、隣の人程、案外仲が悪いんですね、利害関係でいつもぶつかるので。ところが、南海トラフが起こったことを想定して、隣近所で助け合う仕組みを作るということでいくと、みんなその仲が良くなるんですね。防災には不思議な切り口があるんじゃないかと思います。

片田 頑張る子どもたちを見て、否定する大人がいないし、そして子どもたちがあんなに頑張っているのに自分達はこれでいいのかとなりますよね。実は、小木は最初。自主防災会がなかったんですよ。ところが、中学校が動きだしたら。全ての地区で一挙に自主防災会ができた。まさに子どもが地域を動かすという形で発展している。

畦地さんは、小木中学校を見に行っていますよね。感想を頂けますでしょうか。

畦地 今年の 2 月に小木中学校を訪問させて頂きました。そのとき、廣澤先生が 2 年生の担任でしたよね。今日紹介された小木中学校の教育効果は、僕は予想していました。というのは、学校の廊下に自主学習の表が貼ってあったんですけど。2 年生の日々の自主学習時間が圧倒的に多かったんです。それを見て、「この子たちは、3 年生になったらかなり伸びるんだろうな」と思っていたので、「やっぱりな」という感じです。

先生方に喧嘩売るようことになるので、今日は言わないでおこうかなと思っていたことがあったんですが、小木中のお話を聞いて、やっぱり言おうと思います。それは、『先生、教えないでね』ってことです。

何が言いたいかというと、今、教育現場では『アクティブラーニング』というものがあって、これを推進している学校もあるんです。たまたま教育雑誌を読んでいたら、アクティブラーニングのことが載っていました。ハーバード大学のエリック・マズール教授という人の研究成果が紹介されていた。『ラーニングピラミッド』、つまりどういう事をやれば教育効果があるかという理論なんですけど、一方的に生徒に教える『講義』の平均学習定着率は 5%しかないそうです。次に『読書』は 10%、『視聴覚』20%、『デモンストレーション』が 30%、『グループ討議』が 50%、『自ら体験する』が 75%、『他の人に教える』が 90%だそうです。つまり、一方的に教え込むのは意味ないんですよ。小木中学校の生徒が一番最初に小学校 4 年生に教えた。これは 90%の学習定着率で。先生が一方的に教えるよりも 18 倍も効果的なんです。

ということは、先生方が、「今までのように教える」ということをこの際やめてしまって、『教えない』。一方的な講義の授業はやはり効果が少ない。たぶん、先生方が一番実感されている

ことだと思います。そう考えると、防災教育は正解がないので、講義だけでは効果が期待できないとなってくると、『人に教える』とか、『自ら体験する』とか、『グループ討議をする』というようなことを積極的にやることによって、防災教育そのものの効果も高まるし、結果的に学力も上がることにつながる。僕はこれは必然ではないかと思っています。ですから先ほど、國友係長が、金井先生にご説明して頂いたものを図にて説明させて頂きましたけれども、僕はあれは仮説でも何でもなくて事実だと思います。それをはっきりとさせるとというのが、私たちの役目でもあるし、この連絡協議会の大きな目的ではないかなと思っています。

片田 小木中学校で、そんな育ちをしている子どもたちが、まもなくすれば、小木の地域を支える若者になってくれますよね。小木の将来が楽しみだなんて、そんな気がしてならないんですね。もちろん、それは例外もあれば問題点もいろいろとあるんであろうけど、総体として見たとき、あんな子たちが、これからの小木のことをいろいろと支えると考えたら、ちょっとわくわくするところがあるんですね。

友永さんは、34m という巨大津波想定から町を立ち上がらせる、その御旗として缶詰工場をつくりました。しかも、そのブランドマークは青旗印に 34m のロゴ。ちょっと見様によって「はふざけているのか」と言われそうなくらいですけど、逆手に取って、町を前向きに動かすその最先端で頑張っておられます。今の小木の話をお聞きなつて、この先、この黒潮町の子どもたちがどう育まれていくべきだとお感じになりましたか。

友永 小木の良い話を聞いて、「地域とどう関わっていくのか」が一つテーマかなと思っています。私も防災担当していた頃に、結構学校に入ったつもりです。ただ「次こうしようよ」とか「こういう反応があったね」「今度これやろうよ」という感じで、個々の先生方との関係はできてるんですけど、人事異動でその先生がいなくなっちゃうと、学校としての取り組みになっていなかったんで途絶えてしまう。しかも、地域の取り組みになっていなかったんで、学校、地域としても広がりを持てなかったという反省があるんです。だから、その地域に上手く学校が溶け込んで、連携しているっていうのはとても参考になったし、興味深かったです。うちも教育委員会の中で色々な新しい動きがあつて、そういったものは非常に大事にしているとは思いますが、そういった期待感もあります。

一つお願いがあります。私が防災担当をして、防災教育で学校に入ったときの話です。僕が下駄箱で靴を履き替えているときに、僕がいることに気づいていなかった子どもたちが、もぞもぞとしゃべっているんですよ。「また防災、暗くていやなんだよね」って。僕が横にいるに気づいて、逃げたんですけど、これはいけないなと思いました。命に関わることなのですが、リアリティを求めるが故に本当に怖がらせてしまっていたのかなとか。だから、皆さんには、「怖がらせない」、「入り口で扉を閉めない」ような子どもたちとの関わりをぜひ作って頂きたい。そして地域に繋げるという流れを作って頂ければと思っています。

だから、片田先生も言われていましたように、「ふざけたようなことをやってる町があるぞ」、「何でこんななっちゃったんだろう」みたいなところで、多くの方の興味を煽るような形で、防災につなげていきたいと思っています。「防災は楽しい」ではちょっと不謹慎かもしれませんが、興味を持たせる一つの教材、人間を育むことに行き着くための入口として、ぜひ上手く取り入れて頂ければというふうに思っています。

片田 小木の子どもたちは、防災って聞いて「暗いな」なんて言いませんよね、絶対。前向きで楽しくって、そこに向かって一生懸命やっているから、防災を暗い話なんて、絶対思いませんよね。

それと、この前の話で指摘されたように、小木中や小木地区の取り組みは、自校化じゃないですけど、地域の中の学校として活動のかたちができる。学校が地域を巻き込むという継続性ができるというところに大きなポイントがありますよね。今日お集りの先生方はそれぞれで頑張っているんだけど、どうも個人の頑張りにクローズしてしまっている。そうすると、学校全体に広げ、自分が異動してもその学校に組みが残るっていう状態をどうやって作るか、自校化するのか。そして、地域の活動の中の一つとして、学校防災教育があるという形にどう定着できるのか、というのが一つポイントかなという感じがしました。

まだちょっと深め足りないところがあるし、もう少し皆さんの意見もお聞きしたかったんですけども、時間になりました。最後に町長さんに、ここまでの話を聞いて、「黒潮町のこれからの防災教育、斯くあるべし」という町長さんの思いであったり、お感じになったことをお聞かせ頂ければと思います。

大西 学校現場の先生方からお話をお伺いできて、自分たちが気付いていないところとか、自分たちの掘り下げが足りないところを、「本当にこれでいいんだろうか」とか「本当に伝わっているんだろうか」とか、あるいは次長からありましたように「10年後に本当に子どもたちは逃げられるんだろうか」とか、いろんなジレンマを抱えてながらやって頂いていると思うんです。ただし、結論から申し上げますと、やっぱり自信を持って防災教育をやって頂きたいと思っています。

課長から「防災には少し不思議な力があるんじゃないか」という話がありました。僕はこれは本質的なところだと思っています。前田先生から、「今までも戦争と平和っていう切り口であったり、道徳という切り口でやってきた。その成果がどうなのか。そして今度は新たに防災の切り口で、どういう成果があるんだ」という話だったかと思います。極論を言ってしまうと、戦争だ平和だ、あるいは道徳だっていうのは、万人が共有することのできない考え方です。社会契約論者のお言葉を借りるとですよね、色んな考え方、色んな多様な価値観を持たれていて、かつそれを非常に大切にされている方が沢山おられる。そういったカオスの中で唯一コンセンサスが取れるだろうと思われること、これが生命の保持であって継続であって安定性があると。やっぱり本質なんだと思います。従って、防災という切り口で人間の本質的なところを突いていく教育をぜひお願いしたいと思っておりまして、多くの先生方には、すでにやって頂いているんだと思っています。

今日、いろんな先生方からご意見頂きまして、まだまだ自分たちの努力の足りないところもあるだろうなと感じました。だから、これまで以上に、先生方とたくさんお話をさせて頂きたいと思っています。それからもう一つ、「自信を持って教育をやって欲しい」というのは、さっきほども触れましたが、例えば10年後20年後に、子どもたちの意識は今のレベルと比べてどのくらいになっているんだろうなと。仮に今の意識レベルから半分になっていたりとか、五分の一になっていたりだとか、そうになってしまう人がたくさんいたとしても、僕はそれが社会の姿だと思っています。そういうことになるからこそ、社会にそうでない人間を次から次へと排出していかなきゃいけない。これが社会を継続するということであって、防災教育が義務教育課程で施される、一つの命題だと僕は思っています。従って、人間を作り上げるということと同

時に社会を作り上げていくこと、こういうことに大きく寄与して頂いているのが防災教育だと思っています。先生方、全国で一生懸命、自信をもってください。その中でできたジレンマ、「私たちはこんな課題があるんだよ」、「こんな悩みがあるんだよ」ということを、こういう場を利用して意見交換して頂いて、今年よりも来年がより良いものに、そして来年よりも再来年の防災教育が素晴らしいものになるように、子どもと社会を育てるだけでなく、ぜひこの防災教育自体も育てていって頂きたいと思っております。

片田 シナリオのないまま議論を進めてきましたが、奥深いテーマですね。切り口をどう定めるかによって、どのようにでも議論が展開できる内容だなと思います。ただ一つ明確なのは、先生個人が奮闘するだけではどうにもならない問題であるということも事実です。そんな中で先生方が抱えておられる問題がいっぱいあるんだろうと思います。頑張ろうにも頑張れない状況もあると思います。その中でどうすれば学校の防災教育が地域の防災教育に展開していけるのか。その戦術はどんなところにあるのか。今この場では十分に意見を頂くことはできなかったんですけども、あとでディスカッションの時間がありますので、またそこで議論をふっかけて頂ければと思います。身のある議論もできたように思います。引き続き午後に繋げていきたいと思いますので、よろしくお願い致します。

